

2022年2月13日 説教『教えるキリスト』

高橋克樹牧師

聖書 箴言2章1〜9節、マルコ福音書4章1〜9節

「種を蒔く人の譬え」はミレーの名画の題材であり、岩波書店のマークでもあって我が国ではよく知られています。共観福音書すべてに登場する譬えですが、他の共観福音書のもとになっているマルコ福音書4章1〜20節までのなかに、小見出しで見ると、「種を蒔く人の譬え」「譬えを用いて話す理由」「種をまく人の譬えの説明」と、内容的には3つに分かれています。この譬えが福音書に登場したのは、初代教会においてイエスの宣教がなぜわずかな実りしかもたらさないのかという疑問に答えることに、その目的がありました。共観福音書の小見出しはすべて「種を蒔く人の譬え」となっていますが、この譬話の重点がどこにあるのか？ 種を「蒔く人」なのか、それとも「種」それ自体なのか、種を受け入れる「土地」のことなのか、これを読む人の意識によって大きく異なってきます。

本日のテキストでは9節で『聞く耳のある者は聞きなさい』とあるように、「聞く」(アクロー)ことが最初強調され、次に、蒔かれる「種」に重点がおかれています。3節の原文をみると、種を蒔く人が「彼の種を」蒔きに行ったとなっていて、蒔かれる「種」に重点が移行しています。ただ、この譬えを解釈する上ではいくつかの素朴な疑問があります。そもそも種を蒔く人がなぜ「道端」や「石地」、「茨の中」に種を蒔くことになったのか。それは偶然だったのか、単に蒔く人の不注意なのか、それとも当時の種蒔きの仕方が雑であったのか…。日本人の感覚でいうと、種をきちんと蒔くことがどうしてできないのかという疑問がわきます。いずれにせよ、マルコ福音書が関心を向けているのは、「種がたどる運命」神の言葉が蒔かれる「土壌」のことなのです。そして13〜14節で『この譬えがわからないのか。では、どうしてほかの譬えが理解できるだろうか。種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである』(13〜14節)という導入句で、人間の心という土壌で神の言葉をめぐって巻き起こる葛藤について語り始めます。神の種である御言葉が蒔かれた土壌には4種類あるということです(道端Ⅱ4節・15節、石だらけの土地Ⅱ5節・16節、茨の中Ⅱ7節・18節、良い土地Ⅱ8節・20節)。

最初の土壌は神の言葉が「理解できない人」のことです。5節は『蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった』とあります。その説明文である12節では『彼らを見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、理解できず、こうして、立ち帰って赦されることがない』と、神の御言葉を認めず、理解できない者は神の赦しを得ることができないとイエスは言うのです。この種を

蒔く人の譬えからイエスの公生涯における教えの活動が始まりました。イエスは神の言葉を蒔くためにその公生涯を始めたというのがイエスの生涯を決定づけているのです。

しかし、この譬えの最初に登場する道端に蒔かれた種は鳥に食べられてしまいました。鳥の餌食になる神の言葉は、悪魔によって奪い去られるのです。人の心に蒔かれた神の言葉はサタンによって奪い取られる(15節)と、人間の心にはもはや神の言葉の痕跡さえもなくなってしまおうと言うのです。私たちには一時的に信仰から離れることがあります。神の言葉が心に残っていれば信仰の再生もありえますが、そのチャンスさえもサタンによって奪い取られるという教えなのです。

第二の石だらけの土壌とは、「一時(いつとき)しか神の言葉を信じない人」のことです。6節で『日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった』とあるように、神の言葉を受け入れたにもかかわらず、それを自分の生き方の中に熟成させるまでに至らせることができない人のことです。その説明文の16節では、石地は『御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまおう』と、御言葉を受け入れてもその喜びが一時的なもので、しばらくは信じてても、艱難や迫害に直面すると、落伍してしまうというのです。他の福音書では信仰を外から破壊する迫害や艱難があるとつまづいてしまおうという教えになっていますが、ルカ福音書ではキリスト者が日常的に出会う誘惑(ペイラスモス)のこをととりあげています。イエスは宣教の初めに悪魔の誘惑に遭っています(4章13節)が、後に主の祈りを教えたときには、誘惑に遭わないように祈ることを教えています(ルカ福音書11章4節)、ゲッセマネでは誘惑に陥らないように祈ることを命じ(マルコ福音書14章38節、ルカ福音書22章40節)、さらに眠っている弟子たちには誘惑に陥らないように目覚めていることを厳しく命じています(ルカ福音書22章46節)。

このように御言葉を喜んで受け入れた人も、祈りによって誘惑に打ち勝たないと、信仰を保ち続けられないというのです。このような状態を『根がない』(17節)と指摘し、棄教してしまうことを警告しているのです。ギリシャ語で『枯れる』(6節、クセーライノー)という言葉は「教えを捨てる」というのが本来の意味です。誘惑に遭うと人は信仰を捨ててしまう『身を引いてしまう』(アフイステーミー)の原語の意味は「捨てる」。ここでは「自ら捨てる」ことを意味しています。人間が神の御言葉を捨てない限り、神の方から人間を捨てることはありません。この神の愛に自らを委ねないかぎり信仰を保ち続けることはでき

ないのです。このような事例はイスカリオテのユダに典型的に現わされていません。信仰者として成長するためには、誘惑に遭っても神の御言葉にしっかりと根を下ろして生きていくことが大切なのです。ただ、誘惑を遠ざけるだけでは信仰を維持することはできません。よく、この世の誘惑を自分の生活から遠ざけることに腐心する方がいますが、そのような生き方はある意味最初から誘惑に負けているのです。逆説的ですが、誘惑があるからこそ御言葉の真実さに委ねる道が拓かれていくのです。逆に、心の外皮を堅くして外部との関わりを断つと、実は日々の生活の中で刻々と状況が変化する信仰者の心の中に御言葉が入ってこない事態を招くのです。

さて、第三の土壌は「未完の状態に留まるキリスト者」のことです。7節で『茨の中に落ちた。すると、茨が伸びて覆いふさいだ（窒息させた）ので、実を結ばなかった』とあり、説明文の18〜19節では『この人たちは御言葉を聞くが、この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない』と、御言葉を聞く者の命を窒息させてしまう誘惑によって、不完全な信仰にとどまってしまふ人のことを語っています。平行記事のルカ福音書では『熟するまでに至らない』（8章14節）という表現をしています。この「熟するに至る」（テレスフォレオー）という言葉は、最後（テロス）の状態まで持つていく（フェロー）ことで、「完成に至る」という意味の言葉です。思い煩いなどによって信仰が未完のまま最後の完成形に至らないことを警告しているのです。誘惑や思い煩い、富を追求することや快楽に身をさらすことのない人生はありませんが、それらの誘惑もまた信仰を磨き上げていく大切な要素なのです。私たち人間の内部は誘惑に陥りやすい柔らかな命と魂を宿していますが、種と同じように外皮は硬い殻で覆われています。この殻を破るのが恵みの雨としての御言葉なのです。神の言葉を受け入れるとき、サタンの誘惑もまた侵入しやすくなります。サタンの誘惑や危機的状況もまた信仰者を鍛える恵みなのです。そのことを自覚して忍耐し続けることを、この譬えは勧めているのです。

第四の土壌は「良い土地に落ちたキリスト者」のことです。8節で『ほかの種は、良い土地に落ち、芽生え、育つて実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった』とあり、説明文の20節では『良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちである』と、実を結ぶ条件を語っています。『良い土地』とは直訳すると「美しい、善い心」（岩波訳）のことで、このような心で御言葉を聞きながら、御言葉を自らの内面に保ち、忍耐をもって実を結ばしめることを勧めています。御言葉を聞くことは自分を凌駕する神に耳を傾けることであり、その一つ一つの経験がこの世での使命に目覚めさせる

のです。

ブラッドダイヤモンドという言葉があります。人間の血にまみれたダイヤモンドの事ですが、アフリカのダイヤモンド産出国で植民地支配の延長で、自国民を軍事力で支配する政府軍と対立する反政府軍のゲリラの人たちが、自分たちの勢力を拡大させるために、ダイヤモンドを不法に手に入れる際に、たくさんの人たちの血が流されて市場に出て来たダイヤモンドのことをブラッドダイヤモンドというのです。このようなダイヤモンドが婚約の際に給与の3カ月分という宣伝文句によって私たちの身近に供給されているのです。2015年にシリアでフリージャーナリストの後藤健二さんがイスラム国によって殺害されましたが、彼の著書である「ダイヤモンドよりも平和がほしい」という本の中で、その裏側を描かれています。後藤さんは20代後半で洗礼を受け、その後紛争地帯での取材を通して子どもたちや女性など、戦争の正当性を主張する国家による武力闘争の陰で、生きることの困難さに直面した人たちの姿を伝えることに使命感をもって取材をしてきた方です。

御言葉が人を生かす道はさまざまです。問題は御言葉を自らの内側で養い育てたとき、神に凌駕された自分が何をする者として召し出されたのかに気づくことができるのです。御言葉がこの世的な意味での幸福や安定をもたらすのではなく、御言葉を受けとめる土壌としての自分の中で何を養い育てていくかが問われているのが、種蒔きの譬えなのです。